

# ミステリ読書案内

2023. 1. 18 発行元

第438号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 泡坂妻夫の代表作

私が特に愛着を持っている泡坂妻夫の代表作を取り上げてみたい。これまでもこの『ミステリ読書案内』で紹介してきたことの繰り返しになる部分も多いのだけれども、日本ミステリの最高傑作とも呼べる作品群だ。

### 日本ミステリの転換点

大学生になった初めの頃、海外ミステリだけを読んでいた。クイーン、カー、クロフツ、チャンドラー、ハメット、アイリッシュ…。そうしているうちに探偵小説専門誌『幻影城』が創刊された。そこで登場した泡坂妻夫は、私を日本ミステリに向かわせる役目を果たした。それまで私が持っていた日本ミステリのイメージを振り払ってくれた。

江戸川乱歩のようなおどろおど

ろしたものや、松本清張に代表される社会派、笹沢佐保などの風俗ミステリなどの(今考えれば半分間違った)イメージが頭の中にあった。そんな中で、泡坂妻夫の作品は海外ミステリに通じるスマート感があつたのだ。後の島田荘司、そして綾辻行人による「新本格の誕生」程ではないにしても、泡坂妻夫の登場は日本のミステリ界に新風を吹き込んだと言えるだろう。

そんな泡坂妻夫の代表作の紹介。これら以外の作品のどれもお薦め。

### NO.2「11枚のとらんぷ」『ミステリ読書案内』第188号で紹介

### NO.1「乱れからくり」

1977年幻影城ノベルス。『11枚のとらんぷ』に続く長編第二作。私の評価では日本ミステリのベストテンに入る作品であることは間違いない。直木賞候補。日本推理作家協会賞受賞作品。もちろん私は初版で持っている。今は文庫版が何社からか出ている。

最初に登場するのが勝敏夫という若者。ボクサーになる夢を捨て、仕事を求めて宇内経済研究所の門をたたき。出会うのが宇内舞子という所長。この二人が本作品の中での探偵役を担うことになる。調査対象はおもちゃ製造会社の「ひまわり工芸」の経営陣の馬割一族。従弟同志なのに対立する制作部長の馬割朋浩と営業部長の宗児。敏夫と舞子が調査に張り付くと、空から隕石が落下してきて朋浩と妻の真棹の乗ったハイヤーを直撃。朋浩は爆発に巻き込まれてまもなく亡くなる。その葬儀が終わらないうちに次の事件が発生。馬割家の「ねじ屋敷」と五角形の巨大迷路が登場してくる。各章ごとに「からくり」が取り上げられる。最初の章は「かたかた鳥」。鳥の玩具で嘴で板をかたかたつつく動作が面白い。「からくり尽くし」がいかにも泡坂らしい設定である。一族の怨念みたいな日本風を扱いながらも、推理の積み重ねは海外ミステリを彷彿とさせる。

### No.3「亜愛一郎の狼狽」

1978年幻影城ノベルス。『亜愛一郎シリーズ』の一卷目。私にとって思い出深い一冊だ。この単行本初版は古書市場で見ると3万円以上の値が付いているようだが、本当だろうか。探偵小説専門誌『幻影城』に連載された8編の短編を集めた短編集。

巻頭は『DL2号機事件』。第一回幻影城新人賞の佳作になった作品。この時受賞した3つの作品の中では一番面白かったもの。通常は思いもつかない目の付け所と、半分ボケたように感じられる亜愛一郎の人物像がとても魅力的だった。羽田発宮前空港行きのプロペラ機・DL2号機に爆破予告が入った。爆弾を捜したが見つからず、いたずららしいと判断して飛行機は出発。念のためということで、宮前空港には羽田刑事が迎えに出ていた。飛行機が到着する前に強い雨が降り、その後空港には3人のカメラマンたちが現れた。その中の一人は背が高く端正な顔立ち。「ああ」と呼ばれている。聞くと雲の写真を撮っているのだと言う。そんな中、飛行機が到着し、中から乗客が降りてくる。印象的な人物たちを見た後、次の日に事件が勃発しそうになる。「ああ」=亜愛一郎はその出来事に不思議な推理を展開してみせるのだった。論理の妙。

### NO.4「ヨギ・ガンジーの妖術」

1984年新潮社。『ヨギ・ガンジー』シリーズというと、『しあわせの書』『生者と死者』の方が有名だが、本書がその一冊目になる。連作短編集。雑誌『小説新潮』に連載された6編をまとめたもの。

ヨーガの教授、催眠術の名手、はたまた舞台ショーの出演者など得体の知れない人物に見えるヨギ・ガンジーが名探偵を勤める物語。第一話『王たちの恵み』で使われるのは心霊術。ソプリングクラブの講演会に招かれたガンジーが暗くした部屋の中で心霊術を披露している間に、困窮家庭への募金箱の中からお金が消えた事件。不可能に見える現象も超能力なのかトリックなのかで謎解きを試みせてくれる。「とぼけた笑い」は泡坂の得意技。